



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	記念号によせて
Author(s)	土屋, 博
Citation	基督教学, 27, 1-2
Issue Date	1992-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46515
Type	journal article
File Information	27_1-2.pdf



記念号によせて

土 屋 博

一般に学会活動には二とおりの意義がある。一つは、言うまでもなく先端的で創造的な学術研究の推進であるが、もう一つは、学術情報の普及と関心の掘り起こしである。日本のように中央と地方の文化的格差が意図的に作り出されている社会にあつては、地方の学会で後者に力点がおかれることになるのはやむをえないであろう。日本基督教学会北海道支部が設立当初から北海道基督教学会と重なり合う独特な形態をとるにいたつたのも、その状況を意識したためと思われる。しかし、学会そのものからは若干遅れて出発した会誌『基督教学』の刊行は、活動の最大目的をあぐまで独創的な研究成果の発表と蓄積におこうとするこの小さな集団のひそかな心意気を示していた。今創立三〇周年の記念号を出すにあたって、あらためてそれらの点を想い起こす時、成果の自己評価においてはさまざまな問題を残しながらも、まずは活動全体の持続力に対してささやかな満足を表明することは許されて然るべきであろう。

周知のように、意見の対立に基づく抗争・分裂は宗教集団の宿命であり、キリスト教も例外でないばかりか、歴史的に見ればまさにその典型であつた。そのような宗教集団と不可分の関係にある学会は、学問の中立性というたてまえにもかかわらず、ともすればささいなことをきっかけとしてこじれがちである。これは多くの場合、自らの信念にあまりに固執するところから生じるのであるが、当人がいつになっても事態を自覚しないと実害をもたらす。学問としてのキリスト教学は、ひたすら研究者の自覚と良識に期待しつつ、あぶない橋を渡っていくのである。それは神学

と無縁ではないが、決して同一ではない。キリスト教学を成り立たしめる方法は、本質的には宗教学の方法と相通じるはずである。その方法は一義的に確立された不動のものではなく、可能性を求めて繰り返し吟味さるべき多様な性格のものであろう。この点についてつつこんだ議論はまだなされていないが、いづれ折にふれて問いなおされることになると思われる。

キリスト教学の方法論という点では、日本基督教会の方針もきわめてあいまいであり、近年になってそのあいまいさはますます増大しつつあるようにすら見える。個別学問領域にはよかれあしかれ厳密性が要求されるが、それを回避していると、今度は無限に焦点がかすんでいかざるをえない。こうした現状を見てみると、北海道基督教会の三〇年の摸索はやはりキリスト教学の根幹をなす本質的疑問とたえずとりくんできたのだということを感じる。問題を意識を活性化する点では、本会はむしろ他に先んじているかもしれない。地方特有の種々の具体的出来事を媒介として積み重ねてきたこれまでの経験ができるだけ客観化し、斯学に新たな方法論的寄与をなすことこそ、われわれの今後の課題となるであろう。